

新潟港海岸の魅力と地域づくり プロジェクトチーム活動について

宮坂 義朗¹・志村 拓実²

¹新潟港湾・空港整備事務所 第四建設管理官室 (〒951-8011 新潟県新潟市中央区入船町4-3778)

²新潟港湾・空港整備事務所 品質管理課 (〒951-8011 新潟県新潟市中央区入船町4-3778)

新潟港海岸(西海岸地区)直轄海岸保全施設整備事業は37年に及ぶ事業が完了し、令和5年度に完了式典が行われた。完了式典前後において海岸の事業効果を広く知らしめ理解を深めてもらうことにより、地域とともに魅力ある海岸利用へつなげることを目的とした事務所職員によるプロジェクトチームが発足され、市・地元自治会等と連携し、様々な広報活動を行ったのでその活動内容について報告する。

キーワード 新潟港海岸、プロジェクトチーム、地域づくり、広報活動

1. はじめに

新潟港海岸(西海岸地区)は、信濃川から供給された豊富な土砂の堆積作用により発達し、明治に至るまでに海岸線は少しずつ形を変えて砂浜を生成してきた。

しかし、河川改修や西突堤工事が行われ信濃川上流部から運ばれる土砂量が減少したことで海岸線の侵食が始まり、明治から昭和に至るまでに砂浜は最大350mも後退した。

昭和20年代から本格的な侵食対策施設(離岸堤・縦堤)の整備により砂浜の大幅な後退は抑制されたが、離岸堤前面の海底洗掘進行や沈下などによる影響で侵食は収まらず、背後の市街地を防護するための抜本的対策を講ずる必要があった。

このような状況を改善するため、昭和61年に「よみがえれ! 私たちの砂浜」をキャッチフレーズに、地元の大きな期待を受けて事業が始まった。

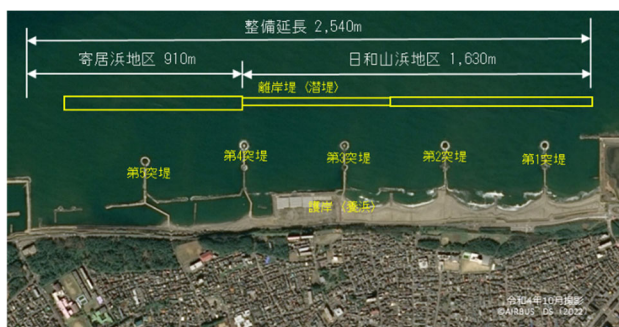


図1-1 新潟港海岸 全体図

新潟港海岸(西海岸地区)では、新たな海岸侵食対策工法として離岸堤(潜堤)、突堤、護岸(養浜)を総合的に組み合わせる「面的防護工法」を導入し、令和5年7月29日に完了式典が行われた。

本報告は、この37年にも及ぶ大規模事業により復元した砂浜を、市民や地元の子供達に身近で大切な財産として再認識し、利用してもらうため、事務所若手職員を中心としたプロジェクトチームを立ち上げ、関係機関と連携した広報活動を行ったので、その活動状況と効果について報告する。



図1-2 新潟西海岸復元事業着工式(昭和63年7月29日)

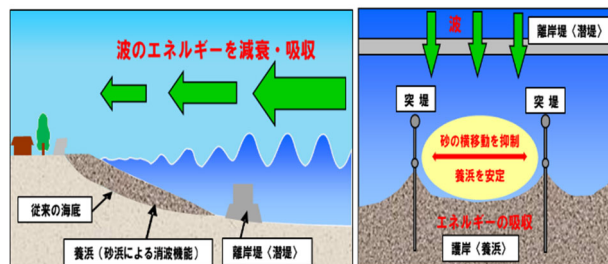


図1-3 面的防護工法の断面図及び概略図

2. プロジェクトチーム発足

(1) プロジェクトチームの目的

プロジェクトチームは、令和4年度に整備が完了した新潟港海岸（西海岸地区）の事業効果を広く発信し、地域と共に魅力ある海岸利用へとつなげていける完了式典及び関係イベントの企画、実施を目的に令和5年2月に発足した。

(2) プロジェクトチームの目標

- ①職員自らが自治会、学校、コミュニティなどと連携し参加することにより海岸事業完了式典を盛り上げる
- ②プロジェクトチームに関わることによって平成の大事業である海岸事業について職員自ら理解を深める
- ③事業効果の発信を自ら企画し実施することにより地域貢献の意味を体感し、スキルアップにつなげる

(3) プロジェクトメンバー

プロジェクトメンバーは、係長、係員を主体とした事務所若手職員のほか、プロジェクトチームの総括として海岸事業担当の管理職2名で構成され、イベント企画に合わせてA～C班の3班に分けて編成された。

A班 広域チーム（地域主体のイベントとの連携）

B班 子ども担当（小学生の総合学習との連携）

C班 地域活動（完了式典に関する地域との連携）

毎月全体ミーティングを開催し、プロジェクトの進捗状況報告、各班に分かれた企画立案等を行った。また、その他の外部との連携として、海岸の利活用促進など思いを共有する新潟市中央区役所と交流会を行い、イベント企画の意見交換を行った。



図-3 全体ミーティングの様子



図-4 新潟市中央区役所との交流会

3. プロジェクト始動

(1) プロジェクト1：海岸への愛着醸成活動

a) ターゲットと目的

地元の小中学生をターゲットに、海岸清掃や講座といった総合学習を通して、新潟港海岸（西海岸地区）の歴史や事業効果を理解してもらい、地元の海岸に愛着を持ち、大切にする心を育むことを目的として、下記の活動を企画、運営した。

b) 活動内容

新潟港海岸（西海岸地区）に隣接した小学校を対象に校外学習を開催し、海岸事業について学習してもらったほか、新潟市中央区役所における取組活動や、NPO法人新潟海洋開発よりSDGsについても説明が行われ、地元の海岸を通じて学ぶ機会を設けた。

また、完了式典時のアトラクションに参加する地元中学校吹奏楽部を対象に座学を行い、海岸事業について理解を深めてもらった。

座学にあたり小中学生それぞれに向けて海岸について興味を持ってもらうための説明をどのようにすれば良いかをイメージし、メンバーと共有・相談しながら資料を作成した。

更に、NPO法人新潟海洋開発と連携し、新潟港海岸で海岸清掃を行い、拾ったごみでアート作品を製作する活動も行った。



図-5 地元小中学生を対象とした出前講座の様子

c)活動における広報効果

活動後、小学生から御礼の手紙が寄せられた。
小学生向けの座学は、海と日本PROJECTイン新潟から取材を受け、その模様がテレビにて放送されたことで、広く一般の視聴者にPRすることができた。

更にその取組が好評だったことで今年度も総合学習を開催し、海岸事業を学ぶ場とした継続的な活動に繋がっている。

小学生が製作したごみアート作品の一部は完了式典会場に展示し、式典出席者の関心を引いた。

中学校吹奏楽部からも感謝の言葉をもらったとともに、完了式典アトラクションに向けた士気を高められた。

今回の出前講座、海岸清掃を通じて海岸事業の事業効果を理解してもらうきっかけを作ることができた。

表-1 児童の感想

自分たちが小さい頃から当たり前にある美しい海岸がたくさん時間をかけて守られてきたことに感動した
昔の砂浜は今の何倍もあったことを知ったときすごくびっくりした
波の力を弱くする消波ブロックが海の中にあると思わなかった
少しでも砂浜をキレイにしたい



図-6 小学生による海岸清掃



図-7 小学生によるごみアート作品製作の様子

(2)プロジェクト2：海岸に来て・見て・発信してもらう活動

a)ターゲットと目的

一般の方をターゲットとして、SNS投稿を活用した参加型のイベントを行うことにより、事業完了および海岸の存在を知ってもらうことを目的とした活動を企画、運営した。

b)活動内容

海岸事業によって復元した砂浜に、小型のLEDライトを使用したビーチキャンドルを設置し、幻想的な雰囲気表現し、一般の方に楽しんでもらった。

また、ビーチキャンドルをより幻想的且つLEDライトを保護するためプラスチックコップを用いたが、イベント告知のため、毎週末新潟港海岸（西海岸地区）で開催される新潟市中央区役所のイベントに合わせて一般来訪者を対象としたワークショップを開催し、イラストを描いてもらった。

このほか企画段階において、当日の運営方法やLEDライトの必要個数の確保、配置および規模など多くの課題があった。



図-8 ワークショップの様子
(当日の様態をテレビ局が取材)



図-9 イラストされたプラスチックコップ

課題を解決するためプロジェクトメンバーやプロジェクトリーダーとの協議を重ね、当日の運営については、プロジェクトメンバー全員で行い、ビーチキャンドルの設置は海岸に訪れていた市民にも協力してもらった。

LEDライトの必要個数確保については、早川堀通り地域連合会やNPO法人にいがた湊あねさま倶楽部へ相談・協力を要請し、約3,600個確保することができた。

配置規模は実際に現地で試験的に配置して、現地での見映えや設置時間等を確認し、最終的に約2,000個のビーチキャンドルを設置することとした。

このほか、告知としてプロジェクトメンバーがチラシを作成し、市報や地域情報紙に掲載いただいた。

c) 活動における広報効果

イベント当日は、夕方に大勢の来訪者と共にビーチキャンドルを波打ち際に並べ、日没にかけて点灯されたビーチキャンドルの光景と夕映えの海岸がより幻想的となり、それぞれが写真撮影を行うなど、参加された方々の記憶に残るイベントとして大盛況だった。

また、昼間の猛暑時に比べて過ごしやす夜のイベントだったことも功を奏した。

一般の方がその場でSNSへ投稿するなどし、それを見た方が訪れるといった相乗効果も見られたのではないかと感じた。

多くの課題があるなか、いろいろな地域のコミュニティと連携し、一般の方にも参加していただいたワークショップやビーチキャンドルの設置、SNSを活用した情報発信により、近隣住民をはじめ、多くの方々に新潟港海岸（西海岸地区）の魅力について発信することができ、プロジェクトメンバーにとって大きな成功経験を得られた。

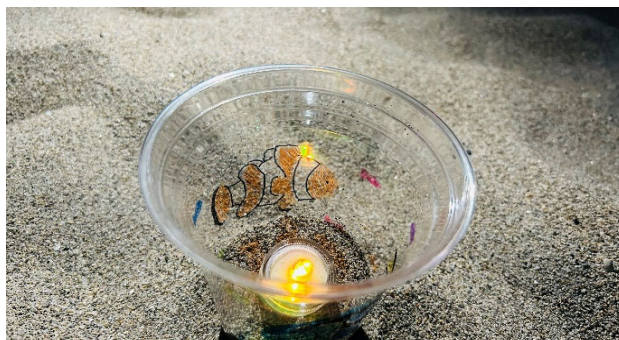
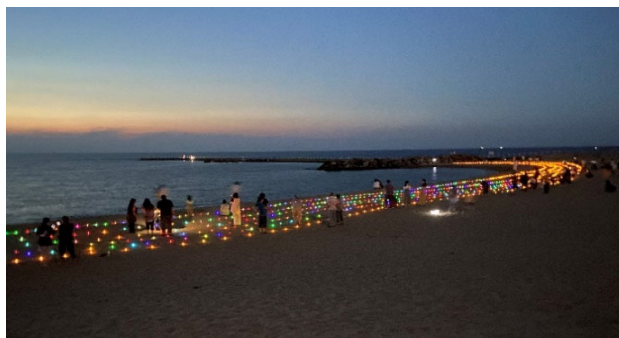


図-10 イベント情報の発信（チラシ、市報）

図-11 ビーチキャンドル設置・点灯の様子

(3) プロジェクト3：地域に親しまれ続ける活動

a) ターゲットと目的

日頃から海岸清掃を行っている地元自治会や近隣住民をターゲットとして、整備された海岸への親しみを今後もち続けてもらうことを目的として、下記の活動を企画、運営した。

b) 活動内容

海岸事業の中で、市道から第5突堤付近へのアクセス歩道を整備した。この歩道に植栽したプランターを設置し、海岸に訪れる方や地元住民の方々に美しい景観を楽しんでもらうとともに、海岸美化のための自発的なボランティア活動を促した。

企画にあたり、新潟地区コミュニティ協議会に趣旨を説明し、とても良い活動だと賛同を得られた。また、植栽への協力団体などを相談したところ、植栽するのは新潟大学附属特別支援学校中等部生徒、ボランティア団体として青陵大学ボランティアセンターと助言をいただいた。支援学校とボランティアセンターへ企画趣旨を説明し、会場は新潟大学附属特別支援学校で植栽を行うことで協力いただけることとなった。



図-12 植栽の様子



図-13 海岸に設置したプランター

植栽当日は、はじめに参加者の皆さまに、パネルを用いて海岸事業と新潟港の役割について説明を行い、理解を深めてもらった後、新潟地区コミュニティ協議会と青陵大学ボランティアセンタースタッフの協力のもと植栽を行い地域交流を深めた。

植栽したプランターは、完了式典当日にセレモニー会場となった西海岸公園の海岸事業着工基石前に設置したほか、式典会場には植栽の様子をパネルにして展示した。

c) 活動における広報効果

植栽したプランターは、一定期間海岸に設置されることで、景観を向上させ来訪者を楽しませることができた。

その後、プランターは新潟地区コミュニティ協議会にて管理されている。

また、実際に植栽し展示したプランターには、植栽者の紹介と当事務所HPへアクセスすることができるQRコードを表示し、当事務所の活動のPRにもつなげることができた。



図-14 式典セレモニー会場に展示



図-15 植栽者の紹介、事務所QRコード明示

4. プロジェクトチームでの活動を通じて

上述の活動を企画・運営していく中で、1つの企画を実施し、成功させるには下記の観点が重要になることを感じた。

- ・基礎的な学び
- ・情報を発信する工夫
- ・地域との連携

企画を立案するにあたっては、発案者がその内容について理解を深めることが重要である。今回の活動では、班での企画検討の前に、海岸事業の担当課より事業内容の講義を受け、メンバー一人一人が、海岸事業の基礎知識を学びその知識を広報活動の企画に繋げた。

また、企画した活動を実施するには、対象者への効果的な情報発信が必要となる。対象者への伝わり易さを追求し、企画に賛同してもらえるような相手の興味を引く情報発信等、取り上げてもらう広報が重要だと感じた。

実際の運営については、関係機関や地域のコミュニティとの連携が必要不可欠で、一緒に活動することで、継続した協力体制が構築され、3.(1).C活動における広報効果に記載のように今年度も継続した総合学習につながっている。

5. おわりに

今回の活動を通して、企画力や調整力のスキルアップを図るとともに、地域と連携して広報活動を行うことの重要性を再認識することができた。

相手に情報発信をするには先ず、自分自身が基礎知識を身につけることが重要で、その基礎知識をもとに、伝わり易さを追求することが大切である。

また、今回は海岸事業に焦点をあてた広報活動であったが、地元には港湾があることをより身近に感じてもらえるような広報活動を今後も地域と連携して行っていきたい。

謝辞：新潟市中央区役所、早川堀通り地域連合会、NPO法人にいがた湊あねさま倶楽部、新潟地区コミュニティ協議会をはじめ今回の活動にご協力いただいた学校関係者、関係機関の皆さまに対しこの場をお借りして深く感謝の意を表します。



図-16 新潟港海岸（西海岸地区）直轄海岸保全施設整備事業完了式典（令和5年7月29日）
昭和63年7月29日の新潟西海岸復元事業着工式からちょうど35年後の同日に挙行